

第1回滋賀県総合教育会議 会議録

1 日時

平成28年4月27日（水）16:00～17:50

2 場所

滋賀県庁東館7階大会議室

3 出席者

三日月知事、青木教育長、藤田委員、佐藤委員、宇野委員、土井委員

【ゲスト】秋田県潟上市立大豊小学校教諭 森井 貴士 氏

滋賀県長浜市立長浜小学校教諭 吉田 典子 氏

【事務局】池永副知事、西川子ども・青少年局長、水上教育次長、岩谷教育次長、浅見管理監、佐敷総合教育センター所長、望月教育総務課長、河井企画室長（司会）、森特別支援教育室長、辻本教職員課長、板倉健康福祉室長、櫃原高校教育課長、西嶋幼小中教育課長、中村幼小中教育課参事、奥村生徒指導・いじめ対策支援室長、藤堂人権教育課長、大西生涯学習課長、太田文化財保護課長、久保田私学・大学振興課長、島戸企画調整課主席参事、大岡子ども・青少年局副局長、辻教育総務課参事、（教育総務課）土渕企画員、（私学・大学振興課）西川主幹

4 開会

司 会

本日は、お集まりいただき、ありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまから「第1回滋賀県総合教育会議」を開催いたします。配布資料については、お手元の次第のとおりです。

本日の会議は、子どもたちの学ぶ力を高める取組をテーマに議論をしていきたいと考えております。はじめに、先日実施された全国学力・学習状況調査の概要について報告を行います。次に、昨年度、本県から秋田県、福井県へ派遣されていたお二人の教員の方から「秋田県、福井県の教育から見た本県の教育」について、報告をしていただきます。また、本県の学ぶ力を高める取組について紹介いたします。そのうえで、学ぶ力向上に関し、本県の目指すべき教育の方向性について議論を深めていきたいと考えております。

それでは本日の会議をはじめたいと思います。

滋賀県総合教育会議運営要綱第3条第1項により、この会議の司会は知事が行うこととされておりますが、三日月知事より事前に会議の進行について事務局に委任をしていただいておりますので、本日の会議は事務局で進行を務めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、開会に当たり、知事から最初にご挨拶いただけますでしょうか。

三日月知事

今年度、一回目の総合教育会議です。よろしくお願いいたします。また、熊本ならびにエクアドルで地震災害に遭われた方に心を寄せたいと思います。

いろんなところで申し上げているのですが、自然の中で人が人として人と共に生きるということの意味を考えております。

本県にはお祭りが各地域にございますし、その主役が子どもたちというお祭りが多くございます。先般視察させていただいた長浜の曳山祭もそうですし、大津の山王祭もそうです。また、このゴールデンウィークには私も日野祭、ケンケト祭り、あと、できればサンヤレ踊りも見に行けたらと思っております。

このお祭りのなかに、実は、教育的な要素、産業的な要素、文化的な要素など、いろいろな要素が入っているのではないかと思います。

本県にある祭りを大事にして、楽しむと同時にしっかりと伝承していきたいと思っています。

本県の教育においては、もちろん学校の中で先生や友達と学ぶということが大事なのですが、この地域の中で、自然環境の中で、文化財に触れながら学ぶということも大事にしておりまして、そういったこともこの学力・学習状況調査の中で表れているのではないだろうかと考えております。

本年度、教育長をはじめ新たな体制となりました。学ぶ力を高め、そして夢と生きる力を育むこの滋賀の教育をさらにより良いものにするために共に頑張ってまいりたいと思いますので、学校の先生方や委員の皆様方の積極的なご参画をお願いしまして、冒頭の挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

青木 教育長

皆様、お疲れ様でございます。今年度、一回目の総合教育会議ということで、私からも一言ご挨拶申し上げます。

新しい教育委員会制度のもとで、教育長に就かせていただきまもなく一か月になろうとしております。まだまだ勉強の連続ですが、そういう中においても、本県の教育が抱えている課題というのは多岐にわたっているなと思っておりますし、またその課題が一つひとつ教育の分野にとどまらず、環境、福祉、あるいは労働などさまざまな分野に関わっているなと改めて実感した次第であります。

そうした中、この総合教育会議は、知事と教育委員会が対話を重ね、様々な分野で知事部局と連携しながら、課題に取り組んでいき、また解決の方策を見出していくという場において、非常に有意義で、有効な場であると認識しているところでございます。

もちろん、教育委員会としましても、それらの課題の解決に向けて、できるだけ多く学校をはじめ現場に出て行って、子どもたちや先生方、保護者をはじめとする地域の皆様方の意見をくみ上げていきたいと思っておりますし、くみ上げた意見は知事と共有しながら、将来を見据えた教育行政を進めていきたいと考えております。

併せて、この総合教育会議での議論を通じて、本県の目指す教育を広く県民の皆さんに発信することによって、家庭、地域をはじめ、県全体で滋賀県の教育を考えていこうという、そういう機運が醸成できたらと考えております。そうしたことから、この会議にもしっかりと取

り組んでまいりたいと思っております。どうかこの一年よろしくお願いいたします。

幼小中教育課長

幼小中教育課長の西嶋でございます。よろしくお願いいたします。
私からは、4月19日に実施されました平成28年度、全国学力・学習状況調査についての概要を説明させていただきます。

まず、この調査の目的ですが、2点あります。1点目は、児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ること。そして、2点目は、授業改善など、児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善などに役立てるということです。

実施教科は、国語、算数・数学で、各教科とも、主として知識に関する問題、A問題と、「知識」「技能」を様々な場面で活用する問題、B問題が行われました。

この他に、生活習慣や学習環境などに関する質問紙調査として、児童生徒質問紙と、学校長を対象とした学校質問紙も併せて実施されました。本年度の問題につきましては、これまでと同様に、過去の調査で課題とされた内容や、他教科や生活場面で活用できる力を問う問題が多く出題されています。また、質問紙では、次期学習指導要領の改訂を見据えた質問がされていることが特徴であると考えています。

特徴の概要を説明いたします。3ページをお開きください。国語のA問題では、遠足でグループ活動する場所について、公園案内図とパンフレットにある表とを関係づけて読み、希望に最も合う広場を見つけるなど、目的に応じて、図と表とを関係づけて読むことの力を問う問題が出されました。この問題にあります「必要な情報を取り出し考えをまとめる」ことには、これまでから本県においても課題がある内容となっております。次に、4ページをお開きください。B問題では、「食」について興味をもち、地域のスーパーマーケットの店長さんにインタビューする場面を取り上げ、話し手の意図を捉えながら聞き、自分の予想と比べながら話の展開に沿って質問していくことを問う問題が出されました。国語科では、具体的な学校生活や学習場面を題材にして、子どもたちが自分で課題を解決していくような内容が取り上げられています。続いて、小学校算数です。8ページをお開きください。A問題では、バスの定員について考える場面で、バスの定員と乗客数、割合の関係を捉えられているかを問う問題が出題されました。

この割合の問題についても、本県で課題とされている問題の一つであり、毎年のように学力・学習状況調査で出されています。9ページをご覧ください。B問題では、他教科や生活場面の問題の解決に向けて、知識や技能を活用していく問題が出されています。この問題は、図書委員会の取組で、読書活動を進めるにはどうすればよいかという課題について、表やグラフなどの資料を活用し、適切な判断をしていくものです。算数科では、つまずきやすい内容を中心に、他教科や生活場面に活用した内容や既習内容をもとに新たな課題を追求していく授業場面などが取り上げられました。続いて、中学校に移らせていただきます。12ページをご覧ください。中学校の国語科、A問題では、おすめの本を紹介するスピーチの場面を取りあげ、聞き手の立場を想定し、目的に応じて資料を効果的に活用して話すことができるかどうかをみる問題が出されました。13ページをご覧ください。B問題では、本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取る力を問う問題が出されました。このように、中学校の国語科では、生活のなかで触れる身近な資料や具体的な学習場面を題材にし、興味をもったことをさらに自分で調べて学習を深めるような内容が取り上げられていると考えております。続いて、中学校の数学についてです。17ページをご覧ください。中学校の数学科、A問題では、三角形の合同の証明とその意味を理解しているかを問う問題などが出されました。また、18ページのB問題では、2種類の自動車の使用年数と総費用の関係について、互いの総費用が等しくなる使用年数を求める方法を自分で選択し説明する問題など、1次関数についての見方・考え方を問う問題などが出されました。このように、中学校の数学科では、身近な話題を題材にして、なぜそのような答えに至ったのかを問う問題が多く取り上げられています。次に、質問紙調査の児童生徒質問紙について、説明いたします。19ページをご覧ください。「(10) 普段（月曜日から金曜日）、何時ごろに寝ますか」とか「(20) 家の手伝いをしていますか」といった児童・生徒の生活に関する項目や「(33) 先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」など、授業に関する項目などがありました。また、「(32) 先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」など、本年度になって、復活した質問項目もありました。最後に、21ページ以降の学校長を対象とした学

校質問紙について、ご説明いたします。「(20) 児童は、自らが設定する課題や教員から設定される課題を理解して授業に取り組むことができている」といった主体的・協働的な学び、アクティブ・ラーニングと言われますが、それに関する項目や「(30) 指導計画の作成にあたっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列している」など、いわゆるカリキュラム・マネジメントに関する項目などがありました。新しい学習指導要領の検討が進められる中、これらの項目は、今後の学校教育のあり方を示す質問であると捉えられます。

今後、幼小中教育課では、問題の分析や調査結果の検証をさらに進め、市町教育委員会や学校と連携しながら、指導主事も課題意識を持って学校への訪問を行うことで、教員の指導力向上を図ってまいります。また、児童生徒のつまずきなどの課題を把握し、その克服を図るとともに、「学ぶ力向上 滋賀プラン」が実効性のあるものにし、滋賀の子どもたちの「学ぶ力向上」を図ってまいりたいと考えています。

以上で、本年度の全国学力・学習状況調査についての概要の説明とさせていただきます。

司 会

ありがとうございました。さて、滋賀県では、学ぶ力向上の取組の一つとして、昨年度から「学力向上のための教員長期派遣事業」を実施しております。派遣されていたお二人の教員の方をご紹介します。

昨年度、秋田県総合教育センターに派遣され、現在も、秋田県潟上市立大豊小学校に勤務されている森井貴士教諭と、昨年度、福井県鯖江市立鳥羽小学校に派遣され、現在は長浜市立長浜小学校に勤務されている吉田典子教諭です。

秋田県および福井県の教育から見た本県の教育について、森井教諭と吉田教諭から、それぞれ約 10 分ずつ報告をしていただき、その後、意見交換や議論の時間をとりたいと思います。

それではまず、森井先生、よろしくお願いします。

森 井 教 諭

秋田県への研修 2 年目となります森井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。座らせていただきます。

さて、ずばり学力日本一の秋田の秘密を探る。これが私がいただい

たミッションだと思っております。学力向上に関して、滋賀県が学力はもちろん、その基盤となる学ぶ力の向上を目指しているように、秋田県でも学力の基盤を全教育活動における最重点とされています。それが「問いを発する子どもの育成」です。この「問いを発する子ども」は、子どもたちの「問い」を大切に、「自ら学ぶ」を狙ったものです。この背景として、今や全国トップの秋田県も昭和の学力テストでは最下位層だった過去があります。当時は一方的に教え込む授業が多かった反省から、県一丸となって授業改善に取り組んでこられました。

つまり、秋田の学力の秘密は、子ども自ら学ぶ授業にあります。さらに、今年度から、次期指導要領の改訂に向けて、具体的な問いを発する子どもの姿として、「主体的・協働的な問題発見・解決」を目指しておられます。そんな秋田の授業を実際に参観すると、子どもたちの学ぶ姿勢や意欲を肌で感じます。秋田の子どもたちは、学びに対する価値意識が高く、まさに、主体的に学んでいます。一方、学びの姿勢や態度に課題のある滋賀の子ども達。やはり、この主体性の部分が重要だと思っています。

実は、私の息子が秋田の小学校に通っています。秋田に来てから、学校のこと、特に授業のことをよく話すようになりました。家庭学習にも進んで取り組んでいますし、担任の先生からも「勉強が好きなんですね」なんて言われています。その息子の姿を見ると、親としては嬉しい限りなのですが、滋賀県の教員としては、やはり考えさせられるものがあります。

そんな秋田教育の長じた点を、大きく3つ挙げます。それが、「子ども主体の授業」。「指導の温かさ」。そして、それを全員でやる「教員の団結力」です。これらにより育まれている秋田の子どもたちの姿は、まさに滋賀の目指す「学ぶ力を身に付けた子ども」ではないかと思えます。それではまず、子ども主体の授業についてです。秋田で広く実践されているのが問題解決のプロセスを重視した探究型の授業スタイルです。秋田県では、特にこの4つの質問紙調査の結果が良好です。ただ、この質問紙だけでは、その本質までは分かりません。例えば、授業のはじめに、目標を示されていても、それは、先生から一方的に提示されたものか、子どもたちから疑問を引き出し設定したものなのかでは、その意味が大きく違います。秋田では、子どもたちが何を学ぶのかを自覚できるようにされています。展開では、目的のある学び

合いが充実し、終末では、子どもたちが何を学んだかを実感できるようにされています。また、これらの授業では、特に考えを深める・発表する・書くなどの場面での言語活動が充実しています。ただ、この秋田の探究型の授業スタイルを参考にする際、つつい、学習活動に目がいきがちですが、何のためにこれらを設定するのか、その根幹が大切になってきます。まず、根っことして「子ども主体の授業に対する意識」、そして、幹となるのが「ねらいの明確化・具体化」です。秋田の先生は、授業づくりにおいて、ここを非常に大事にされています。だからこそ、これらの学習活動に必要性があり、充実しています。たとえば、幹の部分です。秋田の授業づくりの最初は「ねらい」を明確に、そしてギリギリまで焦点化し、具体的な子どもの姿を設定することです。そして、ねらいに基づいたゴールから逆算しながら、授業を考えていくと、適切な学習活動が設定できます。

また、ねらいを中心として、これらの整合性や妥当性を図ります。こうすることで、授業がぶれず、子どもが主体的に学ぶことができます。秋田の授業スタイルは、あくまでこれら根幹を踏まえた上で成立します。あくまで子どもが主役ですが、そこには、教師の適切な関わりが必要になってきます。そして、これが教師の喜びであると思います。教師にとって進んで学ぶ子どもたちの成長を見るのは、この上ない楽しみ。そのため、秋田の先生は、多忙な中、本当に生き生き授業をされます。このような教師の適切な関わりには授業技術が必要です。求められる授業は変わっても、決して変わることはない不易の部分がまとめられた「あきたのそちから」があります。これらの価値を今一度見直す必要があるように感じます。さらに、それを日々、磨く姿勢も素晴らしいです。

次に、指導の温かさについてです。「秋田の先生はめっちゃ褒めてくれる」とうちの子は言います。正解だけではなく、間違いやわからないも学びを深める貴重な材料として、その過程や努力を積極的に認められます。なので、子どもは安心して自分の考えを表現します。また、学習の基盤となる学習規律や学習方法の指導について、曖昧ではなく具体的であること、全校で統一されていることが特長です。そこまで統一しているんですかと驚く私に、秋田の先生からは、「逆に、なぜ統一していないのかが分からない」と言われ、そのメリットを3つ教えてもらいました。まず、誰が授業に入っても同じ指導ですみ、

効率的であること。次に、系統的な指導の積み重ねで、確実に定着すること。そして何より、子どもが迷うことなく、安心して学べることです。曖昧ではなく具体的な指導として、モデルを示し、型を教えておられます。特によく使われるのが、話型です。このよさとして、子どもたちは、「話型を使うと発言がしやすい。」と言い、積極的な発言が多いです。また、「話型を使おうと思ったら、友だちの意見もきちんと聞くようになる。」と言います。秋田の授業は子ども主体ですが、指導すべきことは、具体的に指導され、子どもの学びをきめ細かく支援されています。

そして、これらを先生方が共通理解し、一定レベル以上で実現できている団結力にこそ秋田教育のすごさがあると思います。その要因として、2つ考えます。まず明確な指針・重点が示され、県全体のベクトルが揃っていること。そして、もう一つが、それに沿って、授業力を向上させるシステムが整っていることです。指導主事や、教育専門監、いわゆるスーパーティーチャーと呼ばれる人たちを中心に、目指すべき授業が共有され、その普及が図られています。さらに、校内研究、小中連携など、学び合える教師文化も素晴らしいです。ただ、これが上手くいっている背景には、授業スタイルや学習規律が統一されていることが大きいです。ブロックをイメージしてください。先生方それぞれの色は違っても、授業の土台が同じなので、重点や、よい実践を取り入れられやすいです。中でも、組織的な授業改善を促していくのは各校の校内研究の充実です。特長は、共通実践事項が中心になっていることです。校内研究の目的は、あくまで、日常的な授業改善です。そのため、何のために、具体的に何をするのかという校内研究を具現化したものを、日々の授業で全員が実践しています。これを中心に、学校体制のPDCAサイクルを確立。日常的な授業の公開。よき実践の共有と、互いに高め合う教員集団になっています。この取組から、ベクトルは小さくても、向きが揃えば大きく進むということを実感しています。

学校体制のPDCAサイクルの特長は、小さな改善の積み重ねです。取組を質的に向上させている2種類の点検・修正として、まず、学力調査の結果やアンケートなどを活用した点検・修正。そして、もう一つが研究授業です。研究授業は、日々の共通実践事項により子どもがどのように変容してきたのかを学校全体で確認する機会となって

います。

さて、ここまで秋田の長じた点を述べてまいりましたが、滋賀県を離れてみて、改めて気づいた滋賀のよさや強みもたくさんあります。中でも多様性はうまく生かすことで滋賀の教育の強みになるのではないかと考えています。

最後になります。秋田の高い学力の要因は、やはり子ども自ら学ぶ授業の追及にあります。ただ、秋田の先生方は忙しい中、どうしてそこまで頑張れるのか。そのやる気スイッチにつながっているのは2つの要素だと思います。まず、授業改善の必要性を明確に感じていること。そして、もう一つが見通しです。具体的に何をすればいいのか、やれば子どもがどう変わるのかといった見通しを持っておられます。今、滋賀県において授業改善の風は、確実に吹いていると思います。授業改善が進めば、秋田のように子どもも先生ももっと授業を楽しめるようになると思います。そう考えると、喫緊の課題である学力向上も決して気の重い話ではなく、忙しい中、取り組む価値は十分にあると思います。秋田の取組を追い風に、滋賀の強みを生かした前向きな授業改善に取り組んでいければと思っています。

発表は以上になります。ご静聴ありがとうございました。

司 会

森井先生、ありがとうございました。それでは、吉田先生、ご準備をよろしくお願いします。

吉 田 教 諭

長浜小学校の吉田です。1年間、福井の学校現場で一教員として勤務し、教育実践を体験してまいりました。今日はよろしくお願いします。

私と同じように、7県11名の派遣教員がおり、自主研究会「福井らしさを探る会」で、教育事情について情報を共有し考える機会をいただきました。情報交換するうちに、教員や子どもに共通する姿が見られ、その背景を調べたいという願いが生まれました。そこから、福井県の小中学校を手分けし視察と校長先生との懇談を行うプロジェクトを始めました。今日は、まず、実際に勤務して感じた福井らしさ、次に学校訪問を通して見えてきた福井らしさの背景について、最後に自校で活かしたい福井らしさといった流れで報告させていただきます。

まず、実際に勤務して見えてきた教員や子どもの姿です。福井の子どもたちは、真面目で規律正しく、粘り強い。また、活動的です。掃除、体力作り、生活規律、集団行動といった取組に対する教員の一体感はすばらしく、目標を全教員が共通理解し、継続指導を徹底される、その協働性に驚かされました。豊富な宿題量を丁寧に見たり、休み時間の個別指導や補充学習をしたりして、低位層の子どもにとことん指導支援される熱意にも敬服します。

学校訪問を通して、そうした教員の姿につながる背景と考えた「福井らしさ」について、まず、学校経営から見えた3点を紹介します。

1点目は、滋賀でいう学校経営管理計画、スクールプランの作成です。前年度に作成され、年度当初に校長先生より教員に熱く方針が語られ、県HPや保護者にも便りで情報発信されます。教育委員や市教委、教育長にもプランのプレゼンや実践の検証報告をします。校長先生の気迫に、教員の気持ちも引き締まり、あいまいではなく、見通しがしっかりもてます。また、目標の重点が2項目ほどに絞られ、具体的な取組として数値目標が設定されます。こうした絞り込みをすることで、具体的な方向性が見えるので、教員のベクトルも揃うのだと思います。一点突破型で、一つひとつを丁寧に積み上げておられます。さらに、スクールプランは、学力向上プランや体力推進計画、校内研究構想、校務分掌、滋賀でいう人事評価記録書と連動し具現化されます。年2回の評価が行われ、点検見直しがされて、学校におけるあらゆるPDCAサイクルの要になっています。そのため、取組に対する教師の意識も持続し高いのだと思います。

2点目は、教職員集団の構築、つまり組織作りにも特徴があります。校長先生は、適材適所、本人の希望を重視しつつも、何年か先の学校経営を見据えて校内人事をしておられます。校長先生が週案にコメントを書かれたり、教員のよい取組を情報発信されたり、教員とのつながりを大事にし、教員同士がつながり学校としてのチーム力が高まるようにと意識されています。例えば、校務分掌は、この人に任せれば安心ではなく、若手やミドルリーダーに多くの経験をさせて視野を広げ学校経営への参画意識を高めたり、学年構成は、若手とベテランの先生のバランスを考えて配置したりして、教員を組織の中で育てようという思いが感じられました。「校長は、管理するのではなく教員を育てることが仕事」と言われたのが印象に残っています。また、優れ

た授業をされる先生の校務分掌を軽減しできるだけ授業公開をしてもらい他の教員の授業力を高める等、自校の財産や強みを活かした学校独自の組織運営をされていました。

3点目は、教員の授業作りを核とした力量形成です。学力調査は、全教員が問題を解いて、結果を分析し対策について協議し授業改善に役立てています。校内研究を通じての力量形成を重要視されています。まずは、市町の指導主事が訪問する学校公開授業研究で、全教員が公開授業を行い、校内研究が活性化されていることです。訪問に向けた指導案は、部会に分かれて全員分検討されます。特に共同参観授業については、事前授業や教師を子どもに見立てた模擬授業をしたり、教材作りをしたり、協働で一つの授業を作り上げておられました。公開後は、指導主事より個別に丁寧な指導をいただき、共同参観授業については事後協議会を行います。こうした綿密な事前研や丁寧な事後研を通して、教員同士が学び合う自然な OJT が推進されています。さらに、市内の教員は、共参授業を自由に参観できます。市内でよい実践が広がり、教員間や学校間の格差の減少につながっています。その他に、一人一授業公開のある学校も多く、全教員が一年に2回授業公開をしています。日々の授業を見てきておられる校長先生だからできる授業へのマンツーマンの指導と、1時間の授業記録が写真とコメント付きでまとめられます。校長先生自らの経験を伝授し、教員の授業力向上の先導役を担っていると感じ、教育への情熱が我々にも伝わってきました。次に、自主研修が盛んであることです。福井では、スライドのように副教材が多いです。滋賀も学び確認テストやガッテンプリント、研究の成果物を出しておられます。滋賀ではセンターや県教育委員会が作成しておられますが、福井では、教育研究会や組合、教科主任等の現場の教員が子どもの実態に基づいて、付けたい力を考え作成することで、教員の力量形成にもつながり、やらされ感も軽減されるというよさが見られます。他にも、小中学校教育課程研究会に全ての教員が所属し、教科毎に授業研究をして授業実践を発表しています。鯖江市では42歳になると校長会による中堅教員研修講座も年に8回ほど行われています。こうした盛んな自主研修が後進を育成していると思います。そして、教職大学院の在り方です。スクールリーダー養成コースでは、勤務校の直面する課題に対して大学院の教官が学校に出向き、共同研究する学校拠点方式をとられています。現場と乖離する

ことなく、実践と省察による事例研究を中心に行われるので、現場が戦力ダウンすることなく、勤務校全ての教員の力量形成、力量アップにもつながっています。

さて、学校経営に見える福井らしさの他に、福井の特色ある教育について2点紹介します。国語の読解力や算数の活用力を伸ばしていくことを狙いとした県の施策であるコアティーチャー養成事業です。2年間の指定で、校内研究の中核となる教員を育て、指導主事が年間10回学校訪問して事前研究会の指導案作りから関わり、その上で授業研究会に参加されます。つまり、コアティーチャーの授業力を上げることに加え、学校全体の研究体制を支援し、レベルアップを狙っています。また、2年目は公開授業を行い、研究成果を近隣の学校に広められます。分かりやすい授業をされる優れた教員を「授業名人」に任命する制度もあります。年に1回、授業名人が優れた実践を県下に広く公開する場を設定し、県下の教員全体の授業力向上を図っています。初任者や経験者研修の講師や助言者としても活躍されています。幼児期から高校卒業までの接続を重視した福井型18年教育の取組も、教員の力量形成に大きく関わる特色ある教育です。18年間を見通して、それぞれの発達段階で子どもたちにより高い力を身につけられるように進めていくことを目的とし、同校種間の連携だけではなく、保幼小、小中、中高といった異校種間の連携・接続に積極的に取り組んでいます。

福井の教員や子どもたちの姿につながる秘密は、実効性の高いスクールプランにより、教員が共通理解を図り同じベクトルで継続した徹底指導ができ、そして、校長先生のマネジメントにより、組織の中で学び合う教員集団のつながりが太くなっていくのだと感じました。また、県や市町との連携により授業研究を核とした教員や学校間の連携、校種を超えた系統性を重視する場が多く設定され、その協働する中で、個々のレベルアップによって学校組織全体もレベルアップし、その結果、子どもたちの成長に結びついていると思いました。子どもの変容が、教員のモチベーションをさらに上げ、冒頭で申し上げました福井の高い熱意や協働性に結びついているのだと感じました。

最後に、私が自校で活かしたい福井らしさです。大きく二つあります。一つは、スクールプランを具現化した生活規律や、体力作り、授業等の取組において、計画と評価段階を大事にしたPDCAサイクルを

確立することです。課題を絞り込み、教員の方向性を揃え、協働していく。気になる小さな課題、学力における弱点などを見つけたら見過ごさず、見直しと修正をかけていきます。赤で囲まれた白地部分の「福井らしさ」を取り入れていきたい。もう一つは、やはり授業力向上だと考えます。今年度は、センターが行っておられる研究事業の中の「学ぶ力向上プロジェクト」の研究委員として学ぶ機会をいただいたので、福井での学びとともに滋賀県で目指す主体的協働的な学びについて深め、伝えていきたいと思います。そして、個業化した授業作りから脱却し、授業作りを核として教員同士がつながる場を作っていきたいと思います。学力調査のつまずきを授業作りに生かし、指導案の検討会や授業を参観し合う機会を増やし、先生方と学び合って、子どもたちの成長につなげていけるよう努力していきたいと思います。以上で報告を終わります。お時間をいただきありがとうございました。

司 会

ありがとうございました。お二方の報告に対するご質問やご意見は後ほど時間を設けております。それでは、続きまして、本県における学ぶ力向上に係る取組を事務局より説明いたします。

幼小中教育課長

それでは、本県において現在学ぶ力向上に向けた取組としまして、授業改善を進めているところでございますが、その授業改善の状況について、豊郷町立豊郷小学校の取組が昨年12月5日にびわ湖放送で、テレビ滋賀プラスワンにおいて「授業が変わる一人ひとりに学ぶ力を」というテーマで放送されました。20分の番組でございましたが、6分半程度に編集させていただいております。放送では、国語科と算数・数学科の指導主事が解説を加えておりましたが、そちらは割愛させていただきました。授業そのものをご覧いただきまして、感じ取っていただければと思います。よろしくお願いします。

司 会

それでは、ここからは自由に意見交換をしていただく時間とします。秋田県、福井県へ派遣されていたお二方の報告と今ほどの事務局からの説明についても、意見交換をお願いします。いかがでしょうか。

三日月知事

ありがとうございました。お二人の先生方、何より今日も学校で授業があるんですね。その中、子どもたちと向き合う時間をこちらに

割いていただきありがとうございます。また素晴らしい資料をつくっていただき、ありがとうございます。

会議に来ていただいている皆さんにまず申し上げますけれども、真似しよう。ええとこを真似して、もちろん滋賀でもうすでにやっていることもあるんですけども、良いなと思うことをすぐに真似して、できれば本年度から、遅くとも来年度からは確実にやりたいなと思います。

さて、森井先生、子どもさんが変容したとおっしゃいましたが、変容した一番のきっかけとは何だったのでしょうか。

森井教諭

元々、学ぶことの好きな好奇心旺盛な子でしたが、先ほど説明したように、子どもが授業のことを家でたくさんしゃべるようになりました。例えば、自分がこんな発表をしたときに先生が褒めてくれたとか、まわりの人たちがすごいと拍手をいっぱいくれたとか、そういったみんなに認められた嬉しさが一番大きかったのではないかなと思っています。

三日月知事

吉田先生、福井県では校長先生がものすごいリーダーシップを発揮されているようにご説明を聞いて思ったのですが、比べて滋賀県の校長先生はどうでしょうか。

吉田教諭

たぶん、滋賀県民は奥ゆかしさがあるので、内に秘めた情熱はもっておられると思うのですが、それを直に教員にアピールされるというより、柔らかに伝えてくださる。一方、福井の校長先生は自分がこういう風にしたいということを、ストレートに伝えられます。また、4月に赴任し、県庁に挨拶に行かせていただいた時のお話と、市教委に挨拶に行かせていただいた時のお話、そして学校の一回目の職員会議に参加した時のお話が、どの場面でも、言われる内容がピタッと一致していました福井県では、しっかりとした県としてのつながりが素晴らしいなという思いを持ちました。

三日月知事

ありがとうございます。

藤田委員

いや、素晴らしいですね。ありがとうございました。先生の説明が

あんまりにもお上手だったので、納得してしまうというか。知事のおっしゃったとおり、良いところを真似していくということは大事なんですけれども、そこでちょっと二、三伺います。一つは、秋田県に行かれて本当にありがとうございます。ご苦労様でした。秋田の秘密を探るということで、ずいぶん探っていただきまして、見えてきたことは、まず問題を把握させる、これは私にとって非常に印象的でありまして、やはり自分で試行して、自分で解決していくためには、問題を子ども自らが発見していくことに、原点のような、なるほどなという感じがしました。そういう意味では、大変良いなということと、もう一つは、民間の企業でもよく使うことなんですが、効率化とか組織の一体感とか、産業界の ISO になぞらえて言うんですが、教育の ISO みたいなものと感じました。教育の品質管理みたいなものが、秋田の中ではあるような気がしました。企業には経営品質というのがあるんですけれども、教育の ISO みたいなものが、そこにあるような気がいたしました。そういうのを勉強し、生かしていければと感じました。

福井に行かれた先生、ありがとうございます。多分学校を取り巻くいろんな研究を通じて、先生方の力量を上げていくといいますか、吉田先生から聞いて、お二方の先生ともお話がお上手なので、みんな納得してしまっ、うんうんと聞いていたのですが、これをいかにうまく滋賀県で生かしていくかは、これからの課題ですね。福井の場合は、大学を、学校を取り巻く研究を通じての先生の力量向上の取組がうまいと感じました。いずれにしても大きな参考になりましたが、福井には全国から結構な数の方が来ておられましたですね。他の県から来ておられる方はどのような課題をもって来られたんですか。先生方同士でそういう話し合いはあったんですか。

吉 田 教 諭

福井は学力も体力もトップレベルなので、学力を向上させるための秘密を探ってきたさいと、どの県でも言われているようです。滋賀県は今年度初めてなのですが、高知からは4名、茨城から2名、熊本、長野、奈良、鳥取から各1名ずつ、数年前から派遣されています。皆さん同じように学力向上で来ているのですが、やはり、教員の姿、子どもの姿はこうだ、でも福井の教育風土や家庭環境がそうさせているんだろうという結論では自県に持ち帰れないということで、教育の土壌がどう違うのかを探れば良いなという話になり、福井県内の学校

を訪問させていただきました。ありがたいのは、福井は自主研修をすごく大事にしておられるので、他県からの私たちにも温かく、こういう自主研修の機会をいただいて、予算も出していただいて調べることができました。

藤田委員

やっぱり同じ課題をもって来られていても、来た人によっては、課題の受け取り方が違ったりしますので、そういう点では、横の話合いをされたことがプラスになれば良いなと思います。もう一つはコアティーチャーの養成に力を入れておられたような気がするのですが、コアティーチャーの養成というのは、福井県独特の取組、よその府県にはない取組なのでしょうか。コアティーチャーというのは、滋賀にはないのでしょうか。

吉田教諭

その学校の研究主任を育てていこうということです。滋賀県でも学ぶ力向上プロジェクトという研究事業を立ち上げられ、実践と研修の往還で授業力を実際につけていこうとされています。センターの研究員が来校してくださって、一緒に研究を進めることができそうなので、コアティーチャー養成事業と似たものが立ち上がったと思っています。

三日月知事

ちなみに、滋賀ではコアティーチャー、授業名人、スーパーティーチャーといわれる方はいるんですか。

教育次長

高等学校には英数国5名ずつおります。

総合教育センター所長

今お話しいただきました総合教育センターで、今年度から学ぶ力向上プロジェクトで、希望していただいた先生方に来ていただきまして、一緒に今吉田先生にも入っていただいているんですけども、悉皆ではなく、自分たちで自分の学校を変えていきたいということを一緒にしていけるようにということで、センターに来ております研究員が中心になりまして、今年から始めるようにしております。

藤田委員

秋田のスーパーティーチャー、福井のコアティーチャー、授業名人。名称が違っただけで、各県同じような取組をされているのかなと思います。

す。最後にもう一点、滋賀県の発表も聞きまして、秋田、福井に負けない取組をされていると感じました。滋賀県の良いなと思ったところは、考える力をベースにして、授業に全員が参加できるような仕組みになっているところ。一人で考えて、ペアで考えて、グループで考えて、最後にまとめる。滋賀の教え方は、子どもたちが参加せざるを得ない仕組みになっている。あれはすごく良いと思います。私が小学校とか中学校とかを思い出しても、必ず一人か二人かは寝ている人がいた。そういう意味では、滋賀県の取組は良いし、個人個人が、知識を覚えるというよりも考えるということを通じて、それに参加しながら、最終的に全体としての教育効果が出ている。自己解決力と集団の力が出ており、滋賀県も負けてへんなという気がしました。

土井委員

森井先生、吉田先生、ありがとうございました。実は、森井先生は私の息子の小学校時代の担任の先生で、とてもよい授業をされると以前から存じ上げております。今日のお二人のご報告を聞いていて、とても明晰で、何を伝えたいかということがよくわかるご説明をしていただきました。先生自身が言いたいこと、あるいは取り扱わなければならないことを理解しているということが、よい授業をされるためのまさにポイントですので、両先生は非常にいい授業をされるんだろうなと、話をうかがって思いました。

今日、ご報告いただいた内容自体は、とてもいい内容ですし、確かにこの通りやっていくべきだと私も思います。しかも、この内容は決して、新規な内容ではなくて、昔からある意味で教育の王道と言われていた内容を、非常に現代的に整理をしていただいものですから、おっしゃっていただいたことに対する異論は、そうそう出てくるわけではないと思います。問題は、子どもたちを主体的に学習させるということが重要である、やる気をもって学ばせるということが、子どもたちが伸びるために重要であるということと同じように、現場の先生方が主体的にこれに取り組んでいただく必要があります。やらされている感ではなく、自分たちがやらなければいけないと思ってやっていただくことが恒常的な授業改善につながりますし、それがまた、ご自身の自信につながるんだと思うんです。そこで、お伺いしたいのは、滋賀の先生方がこういう事柄を自主的に、自分でやらなければいけないと思っていただける、積極的に取り組んでいただけるようにするため

に、教育委員会としてどういう働きかけが一番効果的だとお考えになるか。従前は、なかなかこういうことができてこなかった事情もあると思うんですよね。そのあたりについて、一言でいうのは難しいと思いますが、自分自身の感覚の中で、こういうところに気を付けながら、こういうことをメッセージとして伝えていけば現場としては動くんじゃないかというようなことがあれば、両先生から伺えればと思います。

森 井 教 諭

私のプレゼンの最後のスライドの資料に、先生方のやる気スイッチを押すポイントとして、授業改善の必要性と見通しを感じるということかなというふうに思っています。その必要性について、秋田の先生に「なぜ、そこまで頑張るんですか」「忙しいのに、本当によく頑張りますね」と聞いたときに、秋田の先生は「やるのは、とても大変だ」と、おっしゃっていました。ただ、「やらないともっとおそろしいことになる」というふうにおっしゃってしまして、みなさんやられていて、やっておられない先生を見ていませので、おそろしいことがどのようなことなのかというのは、私も分かりはしないんですけども、ただ、県として、県独自でやっている学習状況調査がありまして、やはり、その結果というのは全国調査以上に秋田県の先生方は気にしておられるというか、意識しておられます。それを、やはり大切にしながら、何のために、どういう授業をするのかという必要性をもっておられるということが一つです。

そして、先ほど、スーパーティーチャー、教育専門監の話も出ていましたが、やはり、県から授業について、この人の授業を学んでいきましょうということが、県自体が認めておられますので、皆さんがその授業を真似するというか、よいところを取り入れていくという授業改善の方向性が明確です。それで、実際に教育専門監といわれる方たちは、自分で担任を持っておらず、3校を掛け持ちされているんですけども、いろいろなクラスの授業に入って、実際にすばらしい授業をされます。なので、自分のクラスの子どもたちはこうだという言い訳は一切できません。教育専門監の方が授業をされると、子どもたちが生き生きと学びます。そういうふうなよさを実感し、やはり、こうすればいいんだという見通しが持てるというのは、ある意味、ああなるほど、こうやっていこう、こうしなければならんだなという必要感にもつながっていくのではないかと考えております。

吉田教諭

自分がもう少し若かった頃は、子どもが変わるということにすごくやる気が出たんですけども、子どもを取り巻く環境もいろいろ変わってきていて、一人だけの力ではやりきれない課題も多くなっています。福井では教員同士がつながり、いろいろ知恵を出し合って、よい指導が練り上げられて、子どもが変わっていくということを学校評価等で直に感じておられます。そういう経験を積み重ねておられるので、先生方が自ら練りあってやっていこうというスタンスができあがっています。例えば、滋賀で、今の学力調査で自校採点は大変という言葉が教員の中から聞かれますが、福井では、自校採点をすることで、子どもたちのつまずきを知ることができ、授業の狙いが焦点化できるので、そこにだけ力を注げばよくなり、教材作りも楽になるとおっしゃっています。目の前の取組にしっかりと先生方が価値を見出しておられるので、同じことをやるにしても、負担感を口に出される先生が少ないのかなと思います。

三日月知事

自校採点というのは、自分のところの学校で採点するということですか。

吉田教諭

そうです。早く課題などがわかるように、まず速報的に自分の学校で採点をするということになると、まず、大変ということが聞かれるんですけども。

三日月知事

滋賀県でも、やっているのですか。

幼小中教育課長

はい。やっております。

宇野委員

吉田先生、森井先生、大変わかりやすくご説明いただきありがとうございます。私は、神経科医でこれまで認知機能を専門に研究してまいりましたので、本日のテーマである学ぶ力向上ということについて、認知、学力、学ぶ力と生きる力の関係について少しお話しさせていただきたいと思っています。まず定義としては、認知機能というのは、見ることとか聞くこと、見ることの上位の機能として、形態認識などがあります。音を単に聞くことの上位には、音韻認識など音を聞

き分ける力があります。基礎的な認知能力は学力の基礎になります。今回、学力調査で計測される学力の上位に学ぶ力、さらにその上に生きる力があるといった感じで、基礎的認知能力といった下位の能力から生きる力までの関係についてざっくりとしたそういうイメージを持っています。学力調査の平均点自体は、常々知事もおっしゃるように、大きな意味はないというふうに私も思っています。ただ学力調査の低い方の子どもさんたちについては、この学力を保障してあげないと、上位に位置する学ぶ力や生きる力を、育むことが困難になるというふうに考えています。

学力調査の分布は、二峰性になっていますよね、低い層と高い層と。この高い層の子どもさんについては、学ぶ力を育む上での学力は、定着させることができているというふうに考えても大きな間違いはないかと思います。一方、低い層の子どもさんについては、ある程度、手立てを打っていかないと学力不振から学ぶ力を育むことが困難で、さらには不登校などの二次障害を発症する可能性が高いかと思います。こういう認知機能や学力というのは、通常正規分布するんですね。二峰性にならないんですね。でも、正規分布していないということは、環境要因がの寄与が大きいという結果なんだろうと私は理解しています。つまり二峰性の学力調査の下の方の峰は、子どもを取り巻く教育環境というのが寄与因子として重要なのだろうと推測されますし、家庭もちろんですが、学校での学習環境を私たち教育委員会は考える必要があるかと思っています。

最近、読み書きの困難があって、学習が積み上げにくい子どもさんたちの認知機能、形や音韻の認知や読み書きの能力検査も標準化されてきていますし、それぞれに対する指導も確立されてきています。つまり学力調査の低い峰の子どもたちのスクリーニングから指導までが可能になってきています。福井は、このあたりの、学力の低い子どもさん、大体児童の10%程度が該当すると思います低学力の子どもたちの対応という点で福井は先進県とお聞きしています。前置きが長くなってしまいましたが、学力調査の二峰性の問題と関連し低学力の子どもさんたちの対応をどのようにされているのかということについて、それぞれの先生にお聞きしたいと思います。特に、様々な教育的ニーズに応えるための連続した学びの場というものを福井も秋田も、どのような形で具現化しているのかについてもご教示いただければと思いま

す。

吉田教諭

福井は、どちらかというと、学力上位の子を伸ばすというより、下位の子たちをボトムアップすることで、中間層が広い、中間層が高いというような結果が出てきています。鯖江市では、授業における共通実践ということで、ユニバーサルデザイン化の授業が盛んです。支援の必要な子にも分かる、できる授業を提供していこうということで、本時のねらいを精選して、小黒板で学習の流れを示すことで、目当てと見通しがどの子も持て、安心できますし、また、視聴覚機器を活用したり、板書を構造化したりして、目に訴えて、分かりやすいものにしておられます。また、先ほど言われたペア活動、グループ活動を取り入れることで、集団で学ぶ喜び、一方的に教わるのではなく、学習の振り返りで自分の成長を自覚できるような、共有化も進めておられます。

教員が入っても、授業が成立するような、子どもたちが安心してできるようにということで、各学級に、本時の授業の流れを書く小黒板、そして、「めあて」「ポイント」「まとめ」の磁石プレートとか、「ペア学習だよ」「グループ学習だよ」とわかるようなイラスト入りのプレート、そしてタイマーなどが配置されていて、全学級、それらを使って、授業をされています。さらに福井独自のテスト分析から子どもがつまづくであろうという内容を授業の中に取り入れながら、それに焦点を当てて、みんなで意見を出し合って、解決するようなことを、最初に授業案の中にも組み入れておられる先生も多いです。

森井教諭

秋田県の方でも、福井県同様、やはりユニバーサルデザインというのは、みなさんが共通して、実践しておられることです。特に、先ほどあった、やはり視覚化ということで、目に見えるように、聞くだけではなく、しっかり目に見えるような形で、子どもたちが分かりやすくする。そして、何について話し合ったりするのかということがわかるように、焦点化ということであったり、あと共有化という、この3つが特にユニバーサルデザインでは重視されています。

そして、やはりその授業スタイルの統一というのも大きいと思います。特に小学校から中学校に上がるときに、中1ギャップと呼ばれる、急に授業が難しくなったと子どもたちが考えることがないように、小学校でやっておられる授業スタイルが中学校でも同じように実践され

ているという、この小中連携も非常に進んでいるのが特長かなと思っております。

宇野委員 ありがとうございます。読み書きのしんどい子どもさんは、ある程度、個別じゃないと、特に1年生くらいだったら難しいかなというふうに思いますが、そのあたりは、どんな感じでされていますか。

森井教諭 やはり教員の数という意味でも、秋田県は非常に多いなというふうに感じています。私は今、子どもの人数が300人程度の学校に勤めておりますが、県の職員以外に市の職員がおられまして、学習支援員と呼ばれる方たちです。その方たちが非常にたくさんおられます。チームティーチングも含めて、やはり必要な子には個別の支援というのもされています。

宇野委員 支援員は滋賀県にもいるわけですが、そのあたりは、滋賀県と具体的にどのあたりが違うのでしょうか。

森井教諭 予算だと思います。県だけではなくて、市の職員もたくさん、どうしてここまでおられるんだろうというくらい、たくさんおられます。

宇野委員 ありがとうございます。

佐藤委員 改めまして、お二人のお話を私は2回お聞きしまして、ありがとうございました。

以前、ふれあい教育対談で総合教育センターに行き、森井先生のお話を聞く機会があったのと、吉田先生には教育委員会で鳥羽小学校にお伺いして、その時にお話を聞かせていただきました。

お二人のお話を聞いていて分かりやすいというだけではなくて、明るくて楽しくてワクワクしてくる感じ。私は教員ではないんですけれども、指導者としてこういう指導をしたい、こういうふう to 人を育てていきたいという夢を持てるお話をしていただいて、心が躍るといいますか。先ほど知事がおっしゃった心が寄るというか。そういうのを感じました。それぞれの土地の風土がしっかりと教育に落とし込まれているということを感じました。

チームワーク、団結力これは教育だけではなくて、当然どの産業でもどの地域でも人としての関わりのなかで本当に大切なことなのだと思います。

そのなかで鯖江の鳥羽小学校にお伺いしたときに、どうして鳥羽小学校の取組を含めて、先生方がみなさん校長先生が言われる中に、チームワーク、団結力、それから風通しの良いことであるとか、学校でチャイムが鳴らなかったんですよね。チャイムが鳴らなかったら、子どもたちはどうやって認知しているんですかと聞いたら、子どもたちは自分で時間を認知しているのだと言われました。そんな凄いことがどうして出来るんですかとお伺いしたら、皆さん口をそろえて当たり前のことですからとおっしゃる。当たり前ですかと聞くと、滋賀では違うんですかということをおっしゃっていました。

今、その当たり前というのは我々が子どものころ、学校は行って当たり前、学んで当たり前、一生懸命話を聞いて、テストの点数を良くして、ちゃんとするのが当たり前。その当たり前感が時代の流れで変わってきているというのが地域の特性と言いますか。滋賀らしさ、滋賀ならではの根本なのかなと思ったりするんですけれども。何が当たり前なのかということを子どもたちと先生方が理解をして考えて行動するということが、県と市の一体感の中に生まれてきているのかなと思いました。まさに、子どもたちも可能性を秘めているし、先生方も夢を持って先生になられているわけで、それを取り巻いている教育委員会の皆さんですとか、市も県もそうだと思いますけれども、良くしたいと思って関わっていらっしゃると思います。

考え方にはプラスとマイナスがあってそのプラスとマイナスの掛け算で、成果が出てきますので、マイナスの考え方、エネルギーが増えてくると、結果も当然マイナスになってくる。プラスであれば、当然プラスに成果が出てくると思いますので、この滋賀県ならではの、滋賀らしさを、口でプラスの言葉を書くと、夢が叶うという字になると言われますが、プラスのエネルギーの連鎖が琵琶湖を取り巻く各市町の存在のあり方、琵琶湖というのは各市町が連鎖してはじめてその地形が生かされているのだと思うので、そういうものが我々教育委員会から情報発信していければよいなと思っております。

お二人にお聞きしたいのですが、先ほど森井先生がおっしゃった小さな変化についてです。小さな変化の積み重ね、滋賀県も秋田県、福

井県もちょっとしたことの違いなのだと思うのです。滋賀県、たとえば、教育委員会も含めて、ここがちょっと変わると、あるいはここがこうなるといいよねと思うこと、お聞かせいただければと思います。

森 井 教 諭

先ほども申し上げましたが、滋賀県の強みというものがあって、福井県の強みがあって、秋田県の強みがある。私は滋賀県の強みは多様性だと思っています。それにプラスして、今、一見弱みに見えているところを強みに変えていくことができないかということ、小さくはないのですが、思います。

たとえば、秋田県であると、先生がたくさんおられるということをお話ししましたが、少人数学習というものを推進されています。というのは、秋田県はすごい勢いで人が減っていつている。子どもの人数も減っていつている。その弱みというのを逆に生かして、少人数にお金をかけることで、さらに充実した支援ができるのではないかといいことをされています。

滋賀県の今ちょっと大変だとなっている弱み、たとえば若手教員が急激に増えてきたという、一見弱みに見えることが実は若い先生は子どもたちに近い分、学習者である子どもの気持ちが分かって、子どもの視点で授業を考えることができる。若い先生方を生かした取組などをしていつてはどうかと思います。

吉 田 教 諭

今言われた授業を実現するにも、やはり学級の中での子どもたちの関係がうまくいつていないとできないので、授業改善だけではなく、学級づくりが大切です。例えば生活規律一つとっても、これをしましようではなく、なぜあるのといつたとき、人への思いやりがあること、例えば給食の後片付けですけど、カレーとか汚れが落ちにくいものがあつた場合は、要らなくなった布で一年生から全員ふき取るんですね。そうすることで、配膳していただいている方の労力を減らし、感謝の気持ちを育むなど、そうしたちょっとしたことなのですが、普段の生活の中に、価値を見出して指導されています。授業も第一にされているんですけども、そうした面での指導が、学校全体で大事にされているような気はします。

佐 藤 委 員

お聞きしていると、当たり前の話なのに、それがうまく伝わってな

い。小さいことってというのは、そういうことを具体的にどう伝えるのかということなんだろうなと思います。それが県とか市とか、そういうことのある意味良い部分で垣根を越えていくというところに、何か小さなヒントがいっぱい詰まっていて、それが結果として大きな問題となっているだけなのかなと思いました。ありがとうございました。

三日月知事

お二方が共通して言われた、教員の団結力とか、教員同士のつながりとかは、滋賀にはないですか。あるけど生かせてないのですか。こんなところが違うなと感じること、もしくは、こうやっているからより団結力があるように見えるということはあるですか。

吉田教諭

滋賀にいたときは、それでつながりや団結力、チーム力があると思っていたのですが、いざ1年間福井で勤務させていただいたところ、さらに居心地がよかったです。

三日月知事

それはどこが違うのか、どんなところにそう感じさせるものがあったのでしょうか。

森井教諭

滋賀県の学校現場は非常に楽しく、職員室も、教室ももちろんですが、学校自体が僕自身好きでした。秋田県へ行ってもそれは変わらないです。ただ、やはり団結力があると見える、全国からそう感じられることは、やはり全員が共通して実践していることが一つでもあるということかなと思います。これだけは毎時間、全員、全教室が必ずやっていることがあることが実際に具体的な数値としても現れてくるし、団結力につながっているのかなと思います。

三日月知事

お二方が両方とももう一つおっしゃったのが、型とか、統一とか、スタイルとか、システムとか、ある程度統一されたものが小中学校のすべての科目、授業であり、これは滋賀ではまだまだ統一できる余地がある、型をつくる余地があると、そんな状況ですか。

森井教諭

まだまだ統一できる余地があると思います。ただやはり、私も現場にいたときに、型って言われると、みんな同じことをするのかっていう風に思っていました。ただやはり実際に秋田の授業を見て、確かに

授業のスタイルに型はあるのですが、先生方それぞれの色は違いますので、それぞれの個性を生かした授業になっております。

三日月知事

先ほどのブロックのようにですか。

森井教諭

そうです。まったく同じ授業というのはありません。やはり、子どもが主体の授業だから、子どもに合わせて授業をされています。これを必ずやりなさいという型にはめるというよりは、授業の土台を揃えた方が、授業の改善もうまく進むということを前向きにアピールしながら、普及を進めていったらどうかなと思います。

藤田委員

最後に、時間がおしてきていますが、一言だけ。今のようなマネジメントによって学校の一体感があるんだろうと思います。そこでお聞きしたいことがあり、一つは経済界や産業界でよく使われるユニバーサルデザインという言葉の教育版、形態的にこういうことが教育のユニバーサルデザインとイメージされていることがあれば教えていただきたいのと、もう一つは、森井先生の発表の中で教員のやる気スイッチの話が出てきましたが、授業改善を実際にやっていくには動機づけが非常に重要でありまして、何をすればとか何のためにということを経験で考えていてはダメで、これをいかに一人称で考えるかということ、本人の一人称で考えないとダメなんですね。その動機づけといいますか、子どもの知らない間に一人称に変える、自分から問題点を言いたくなるようなノウハウがあれば参考になるのではないのでしょうか。

ユニバーサルデザインを学校のマネジメントの一体感、共通意識を持つことができるようになっているのかもしれませんが、属人性の教育というものはどうしても会社などでもあるものですが、それを一体感にしていくマネジメントがあるのだらうなと思いながら聞いていました。

滋賀県の教育は、知事がおっしゃる、みんなで一緒にやりましょうという教育。ボトムアップや全体でいくというやり方ですが、これは秋田、福井でもやっておられるのでしょうか。つまり、ペアで考え、グループで考え、全体で考える。誰も寝ている子どもがいないという授業のやり方は両県でもやっておられるのでしょうか。

森井教諭・吉田教諭

やっておられます。

藤田委員

そうですか。良いことはみんな真似しましょう。やっぱり、学ぶこと的前提が真似することですから、真似することが学びにつながりますので、良いことは真似するようにしましょう。

三日月知事

教育委員会の事務局に聞きたいのですが、もうすでにやっていることはいいとして、秋田県、福井県の事例を改めてプレゼンしていただいて、これはすぐやらないあかんという部分はどこだと考えておられますか。

幼小中教育課長

それぞれの学校での校内研修の活性化をやらないといけないなと思っています。研修については、県内各地から野洲の総合教育センターに来るのに時間がかかる。それに時間をかけるのではなくて、現場での取組、できれば共通実践というところで、各教員が力をつけられるような校内研修の活性化をする必要があると思います。

三日月知事

福井県のプレゼンで福井大学教職大学院との連携が出てきましたが、滋賀県でも同様の取組はあるのですか。

幼小中教育課長

来年度、滋賀大学に教職大学院ができる予定です。そのため、滋賀大学と連携協定を結びまして、準備委員会を立ち上げ、昨年から開設に向けて大学と協働して準備するという試みを今進めております。

三日月知事

それ以外、研修以外で何かありますか。

幼小中教育課長

業務改善だと思います。現場の教員には多忙感があります。研修意欲というものも低下するのではないかと思います。業務の見直しなどで時間を生み出したいと思います。

三日月知事

コアティーチャー、スーパーティーチャー、授業名人についてはどう考えていますか。

幼小中教育課長

今、35人学級の方に教員を配置し、そちらの施策に向けています。

それが全学年で完成しました。国から加配としてもらっているのも、それを使うところをどうするのかという問題です。

三日月知事

学級担任から外せないということですか。

幼小中教育課長

そうです。

青木教育長

私も聞きたいなと思っていたのは、型。型ということで、やはり子どもたちの独自性の発揮がどうなるのかなと思っていたのですが、先ほどご説明があったのでなるほどそうかと思いました。

私は教員ではないので、やることというのは、この4月から多忙感解消というのを思っている。教育委員会事務局では事務を減らそうと言っているのですが、秋田県、福井県でもいろいろな工夫をされている。すごく大変だと思います。併せて、生徒指導などいろいろある中で、皆さんの中で多忙感を感じておられるのかどうかということと、滋賀県でも経験されているわけですから、滋賀県と比べてここが違うということがあれば、教えていただきたいと思います。

吉田教諭

たしかに教材などもたくさん作っておられるので多忙感はあるかと思いますが、子どもの成長とか変容を第一に考えて、効率的な仕事をされているように思います。情報発信について、教員が学級通信で保護者や地域に個々にアピールするのではなくて、校長先生の学校便りや学年でホームページを通して、学校としてアピールしています。こういうところでも個ではなくて学年団や学校というチームとしての意識を感じます。それだけでも軽減になりますし、お互いの経験や知識を共有して補完してミスなく狙いを達成することができれば、結果、多忙感は軽減できるので、そうしたことも大きいかなと思います。

また、校長先生とお話をしていて、ビルドアンドクラッシュという言葉が印象に残っているんですが、子どもの現状やデータ分析から、今、しなければならないことは何なのかということをは話し合っ、て、学校側の業務のスリム化を図っていくことも大事だというお話を伺うことができましたので、学校の中でもそういうことができるのではないかと思います。

森 井 教 諭

教員の多忙感の解消というのはなかなか難しいかなと思っています。ただ、秋田県で皆さんが忙しい中、あれほど頑張っておられるのは教員としての楽しさというものを十分に味わっておられるからではないかなと思います。というのも、授業に集中できる環境というか、授業改善に時間を割ける環境が整っています。多忙感を解消するには、仕事を減らすことも大事なのですが、いかにその仕事を楽しくできるかというのが大事なのかなと思います。すみません。当たり前のことなのですが。

藤 田 委 員

おっしゃるとおりだと思います。多忙感というのは個人差があると思います。ですので、いかにその人が生きがいややりがいを持ってやっておられるかで変わってくるのだと思います。意外とそれほど多忙じゃないと思える人が多忙だと感じることもあれば、休みがなくても楽しくやっている人もいるし、相当個人差があると思います。一番大事なのはその人の生きがいとかやりがいというものをその仕事に持って楽しんでいるかどうかではないかなと思います。

土 井 委 員

教育委員会が取組みたい多忙感の解消とは、先生でなければやれないことを先生が一生懸命やって忙しいのは、多分先生方も受け入れるのだと思います。先生方がしなくていいことをやらせて多忙にさせるからやる気を失うという問題ではないか。やはり、先生方は授業をして子どもを育てたいと思って教員になっておられるわけですから、そのために時間を費やしてもらうことは忙しくても多分気にされないと思うのです。

それ以外の部分の多忙感をどうやって解消できるのかというのが我々の仕事で、そこに取り組まないといけないのだと思います。

司 会

熱心な議論をいただいているところ恐縮ですが、そろそろ時間が近づいてまいりました。最後に、知事から一言頂戴できますでしょうか。

三 日 月 知 事

ありがとうございました。両先生、すべての方に感謝申し上げます。学力を向上させよう、学ぶ力を高めていこう。そのために、授業を改善していこうという取組を滋賀県ではやっておりまして、その成果は徐々に出つつあるのですが、今日は秋田県、福井県の事例をもとに、

さらにこんなことができるのではないかというヒントをたくさんいただきました。これから、さらに力を入れて取組を進めていきたいなと思います。どうか両先生方におかれましては、今後とも子どもたちのために、ご活躍いただきますよう、ご奮闘いただきますよう祈念申し上げます。また、引き続き、滋賀県の授業力改善のためにお力添え賜りますようお願い申し上げます。感想とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

司	会
---	---

本日は長時間の会議、本当にありがとうございました。今年度最初の総合教育会議ということで、大変有意義な会議となりました。次回の総合教育会議は6月29日に開催を予定しております。本日の会議での意見を踏まえ、今後の教育施策や、第2回以降の総合教育会議につなげていきたいと思います。これで第1回滋賀県総合教育会議を閉会いたします。この後、知事と教育長によるぶら下がり取材を、それぞれ5分程度お受けいたしますので、よろしく願いいたします。本日はお疲れ様でした。

(終了)